

**令和 8 年度秋田県総合政策審議会  
第 1 回農林水産部会 議事要旨**

**1 日 時** 令和 8 年 5 月 14 日（木） 午後 3 時～午後 5 時

**2 場 所** 秋田県教育会館 3 F304, 305 会議室

**3 出席者**

**【農林水産部会委員】**

伊 藤 晋 宏 （誌の国秋田株式会社 代表取締役社長）  
佐 藤 亘 （秋田県漁業士会 青年漁業士）  
堀 井 直 子 （株式会社グリーンフォレスト仁賀保 専務取締役）  
三 浦 徳 也 （有限会社折林ファーム 取締役）

**【県】**

飯澤 主貴 農林水産部次長 ほかに関係課室長等

**4 農林水産部次長あいさつ**

今年度は総合計画のスタートの年であり、その円滑な推進には県民に周知を図ることが第一と考えており、農林水産部では県内 8 か所の全ての地域振興局において、関係施策の説明会を開催したところである。

米を基盤としつつ園芸メガ団地や大規模畜産団地などの生産基盤の強化が図られ、ねぎやしいたけ等の日本一を目指す産地づくりが進展したほか、サキホコレや秋田牛のブランド化などに取り組んだ結果、令和 6 年の農業産出額は 2,572 億円、その増加率が全国トップとなるなど、成果が着実に現れてきている。

海外情勢が予断を許さない中、人口減少に伴う労働力不足の深刻化など、社会情勢は目まぐるしく変化しており、スマート技術の更なる普及拡大など新たな取組を進めていくことが重要である。

本部会では、農林水産関係の施策について、委員の皆様から忌憚りの無い御意見、御提言をいただき、今後の取組に反映させていくこととしている。よろしく願います。

**5 部会委員の自己紹介**

**6 部会長選出、部会長代理指名**

委員の互選により三浦委員が部会長に、部会長の指名により堀井委員が部会長代理に指名された。

**7 部会長あいさつ**

皆様とは様々なお付き合いをさせていただいている。忌憚のない意見交換をお願いしたい。専門部会で様々な議論を進め、期間中に提言としてまとめていきたい。

## 8 議事要旨

### ●三浦部会長

審議内容は議事録としてウェブサイトに掲載される。その際には、委員名は特に秘匿する必要がないと思うので、公開としたい。

それでは、議事（１）令和８年度総合政策審議会農林水産部会の進め方について、事務局から説明をお願いします。

### □小野寺農林政策課長

～ 資料２により説明 ～

### ●三浦部会長

次に、議事（２）秋田県総合計画の取組状況について、事務局から説明をお願いします。

### □小野寺農林政策課長

～ 資料３及び資料４、資料５により説明 ～

### ●三浦部会長

事務局から説明があった「あきた農林水産ビジョン」について分野ごとに、各委員から御意見をいただきたい。

## 【１ 日本の食を支える農業を実現する】について

### ○伊藤委員

輸出に向けた戦略についてだが、農林水産ビジョン（以下、「ビジョン」という。）の27ページにあるように、輸出額を増やしていくことは重要だと思うが、具体的に米のどの銘柄を増やしていく等の予定はあるか。また、多収量品種米について、R化していく計画はあるか。

### □坂下水田利用課長

輸出については、あきたこまちがメインとなっている。それ以外には、めんこいな等の多収量品種米を増やす必要があると考えている。

サキホコレをフラッグシップとしつつ、ミドルレンジのあきたこまち、さらに低コストな業務用という３つのレンジで進めることとしている。

R化については、検討を進めているが、具体的にお伝えできる状況ではない。

### ●三浦部会長

伊藤委員に伺うが、顧客から求められる品種はあるか。

#### ○伊藤委員

米の輸出を始めたばかりである。あきたこまちは、国内で取引があるが、海外からはあきたこまちではなく、多収量品種米の引き合いが強い。

#### ●三浦部会長

人材確保の数値目標を設定しているが、具体的な推移が見えてくると良いのではないか。

また、資料3で農業産出額、林業産出額等の目標を定めているが、昨年の実績等はあるのか。毎年の農業、林業に入ってこられる方たちの集計はあるが、各年の産出額はどうか。具体的に見える数字があると良い。

#### □小野寺農林政策課長

新規就農者などの指標については、4年間の年次計画を設定し進めていくこととしており、資料4の34ページに詳細に指標の目標を記載している。農業産出額については基準年を令和6年に設定し、今後4か年における年次計画を立てながら推進することとしている。また、新規就農者であれば、現状の令和6年では270人、これを令和11年には330人として進める予定となっている。

各業績指標については、全てこうした年次計画を立てて取組を進めているところである。

#### ●三浦部会長

専門部会では、これらの数字も注視しながら、今後、どう進めていくかという議論が必要になっていくものと思う。

#### ○堀井委員

林業においても担い手の確保は、同様の問題を抱えている。農業では、計画的に就農してもらうこととして、研修施設や各市町村での育成により、一定数の確保が進んでいる印象を受ける。一方で、農業を始めたいと考えている方が結構いるようなイメージがあるが、中々就農につながっていないのではという懸念もある。その点も含め、今後、どのように進めていく計画か。また、どのようにマッチングを進め、市町村や農家とどう役割分担して進めていくのか教えて欲しい。

#### □小野寺農林政策課長

多くの産業が労働力不足、担い手不足となっており、農業においても減少の一途となっている。現在、農業経営体はこの5年で25%減少しており、このペースでは10年後に半分となる試算がある。

このペースで推移すると、1経営体が2倍の面積を営農していかない限りは今の状態を維持できず極めて深刻な状況となることから、担い手の確保・育成は重要と認識している。

こうした状況の中で狙い手をどう育成していくかであるが、林業では林業大学校、農業においても秋田アグリフロンティア育成研修ということで、農業試験場や果樹試験場等々で技術や経営を学ぶ場を創出し、未来を担う人材を育成しているところである。

市町村においても、秋田市や横手市ではダリアやホップ等、品目を絞りつつも、今後を担うべき人材を育成しているところである。

また、令和6年の新規就農者数270人ということであるが、この人数で秋田県の農業を担っていけるということでは無いため、まだまだ人材を確保していく必要がある。

先ほどの資料5の重点推進事項で申し上げたとおり、今回、官民連携のプラットフォームを設置したところである。そこに関係機関や金融機関、農業機械化協会等も含め、新規就農者と農業企業体をマッチングさせていくなどの取組により、担い手の確保・育成を図ってまいりたい。

### ○佐藤委員

農畜産物の付加価値の向上と販路の拡大についてであるが、異業種連携による6次化商品の開発、販売支援というのは具体的にどのようなことか。

### □藤原農業経済課長

異業種連携による6次産業化についてであるが、生産し、それを加工することまでが二次産業となる。最後の販売まで含んでくると6次産業化ということになるが、農家だけでは展開が難しく、加工業者、販売業者等も関わり合いながら商品開発を進める取組に支援している。

今年度から新たに、商品開発・販売力強化促進事業を創設し、規模としては年間で5件程度、補助事業の上限額を100万円としている。

昨年までもこうした類似の事業を実施していたが、令和8年度からは伴走支援機能を強化し、専門家を派遣してアドバイスを受けながら事業を進め、少しでも商品力、販売力の向上効果を得ようするものである。

商品開発は俗に「せんみつ」と言われ、新しく作った商品は千やって三つ当たるという位、難しいものであり、少しでも成果をあげてまいりたい。

### ○伊藤委員

比内地鶏について、生産農家が減る中で雛の供給体制が重要と考える。また、雄の活用なども重要になってくると思うが、具体的な計画があったら教えて欲しい。

また、輸出について、海外への販売は成果が出るまで複数年かかることから、継続性を持って事業を進めて欲しい。

農業部分野におけるＪークレジットについて9,300万円ほどの成果が出ているとのことだが、この数字は全て農家の元に入ってきた数字ということで理解して良いか。

### □藤田畜産振興課長

比内地鶏の新たな供給体制については、比内地鶏ブランド認証推進協議会と協議中である。供給施設の増強については、生産目標の年間50万羽に合わせていくのか、農家段階で対応していく組織を増やしていくのか、農家や関係団体に聞き取りするなど、今後、ヒアリングを重ねながら検討を進めていきたい。

現在、比内地鶏は雌の肉を出荷しているが、雄の活用についても可能性として考えられるところである。1回の生産で倍の比内地鶏が得られるということもあるが、食味や食感等にこだわるケースもあり、そうした状況にも理解を求めていきながら、検討していきたい。これらの状況等をまとめながら、早い段階で生産者や関係者の皆さんに共有を図っていききたいと考えている。

#### □窪田販売戦略室長

輸出に当たっては、鮮度維持が重要となっているが、令和4年度から7年度にかけて長ねぎ取引量は3倍になっている。東京から台湾まで届くまでに3週間かかるため、ねぎが伸びたり、品質が低下することが問題となっている。台湾は気温も高く傷みやすいことから、包装メーカーと協力しながら、品質保持に力をいれていく。

また、防疫体制にどう対応していくかも重要であり、台湾、タイは厳しくなっている。現在は、りんごが非常に大きなウエイトを占めており、防疫への対応のため、ダニ剤を抑制する実証実験を今年度も3地域振興局で実施しており、継続した産地側の取組により防除体制も整えた上で、取引量を拡大していきたいと考えている。

#### □坂下水田総合利用課長

J-クレジットの考え方であるが、クレジットが取引されている価格の平均値に生産量となる1ha当たりの実績を踏まえて試算しており、それに対象面積をかけて算出しているところ。取組面積についても統計で把握しているものではなく、主な事業者からの聞き取りによるものである。

それらを掛け合わせた結果、面積としては3,600ha程度であり、R6実績が約9,300万円程度、それぞれのクレジットの取引価格が1t当たり約4,260円となり、1ha当たり約6トン程度のクレジットが設定されていることになる。

指標の設定としては、今現状把握している最新の水稻作付面積が8,420ha、その1割程度との考え方のもとに取組面積を設定している。

そこから、年度途中に計画を断念する農家が約2割程度いるので、それらを踏まえて取組面積はR11年に7,000haと設定している。

#### ●三浦部会長

比内地鶏については、タイムスケジュールは早い段階で出していただきたい。この課題が長引いて生産をやめる農家がいたら元も子もない。スケジュールをしっかりと示していただき、農家は安心して飼育し、消費者にも安定的に供給していけるということをしっかりと示して、発信をしていただきたい。

## 【2 森の恵みを未来へつなぐ林業・木材産業を実現する】

### ○堀井委員

今一番の話題として、秋田といえばクマということになる。クマ対策について、予算も増えているようだが、現場では人力作業が多く防護柵の整備なども大変である。林業、農業が協力して、山を守るための具体的な連携ができればいいと考えている。

### ●三浦部会長

クマ対策の予算は、今年度からはどの部署で担当することになっているのか。

### □坂下水田利用課長

今年度から生活環境部自然保護課に一本化して業務が進められている。

農林水産部としては、農業者や林業者の農作業中での安全確保といった面で、アプローチしていく。

予算執行部局は農林水産部ではないが、だからといって農林水産分野のクマ対策が遅れることのないよう、しっかりと実情を伝え、必要な予算の中に要素を組み込んでもらうこととしている。

### □小野森林環境保全課長

今年度からクマ対策は生活環境部の所管となったが、緩衝帯の整備については、森林環境保全課で実施しているところである。国庫補助事業の活用もできるようになり、予算が増加している。要望に応じて、積極的に緩衝帯整備を進める体制を構築している。

### ○堀井委員

外国人のビザの関係について、秋田県ではビザが取りにくいということで、スペインに帰ってしまったケースがあった。日本を気に入ってくれたということで働いてもらったが、女性は1人だったということもあり、力仕事が多いということもあって林業もできなかった。女性支援という点も含めて、もう少し力をいれて欲しいと思う。

新規就業者の目標値について、これは可能ではないかと私は感じた。県でも林業大学校を設置しているところだが、定着率が非常に良くないという印象があり、現在は65%。今年度は、69%まで上げるということだが、定着率の向上のため、どのような改革をしているのか。

我々、林業事業者も頑張っていく必要があるが、賃金なのか、働き方なのか。定着率の目標に注目している。

合わせて育樹祭の今後のことについても、お知らせ願いたい。

### □永井参事兼林業木材産業課長

林業従事者の確保については、非常に重要な課題と考えているが、委員御指摘のとおり

林業の定着率が悪い状態となっている。

県の調査結果では、新規就業者は年間150人程度確保しているものの、林業従事者数は1,400人台で推移しており、令和5年は1,415人、令和6年は1,417人と2人しか伸びていない状況となっている。

理由について分析したところ、高齢により定年で辞める者はいるものの、就業3年未満で辞める者が50%を占めるということで、林業に定着していない状況となっている。

定着率を高めることについては、先ほど働き方なのか、賃金なのかという話があったが、賃金については県での直接支援は難しい部分がある。

林業現場における労働環境を改善し、女性の方も働きやすいような職場環境づくりといったものを重点的に支援し、定着率を高めてまいりたい。

#### □今川全国育樹祭推進室長

令和9年に全国育樹祭を開催する計画となっており、様々な行事も合わせて計画しているところである。お手入れ行事をはじめとして、子どもたちが実施する全国緑の少年団活動発表大会、林業機械の展示・実演会など、様々な形で林業に触れる機会を予定している。

今年度は、特に全国育樹祭を知ってもらうことに注力することとしている。各地域では様々な森林・林業に関するイベントがあり、そうした機会を生かし、記念行事という形でPRする機会を設け、広く皆さんにまずは知っていただく、ということで進めていきたい。

加えて、一年前のプレイベントとして、秋田市のミルハスで様々な林業関係団体も巻き込んだイベントを開催する予定となっており、令和9年に向けて機運の醸成を図ってまいりたい。

#### ●三浦部会長

具体的なスケジュールは今後、公表されるという認識で良いか。

#### □今川育樹祭推進室長

スケジュールについては、令和9年の秋に開催となっているが、日程はまだ確定していない。皇室行事ということもあり、早くて今年の秋口になる。正式な日程は決まり次第、アナウンスしていく。

### 【3 環境変化に対応した新たな水産業を実現する】

#### ○佐藤委員

アオリイカの産卵床を作るため、昨年、杉の木を伐採した枝材を分けてもらった。それを海に沈めると、杉はすぐには腐らず、5月に沈めて8月、9月になってもそのまま茶色くなるが残っており具合が良い。伐採した杉は、そのまま山に放置しているのか。

#### ●三浦部会長

伐採木で枝打ちしたものは終わりだと思うが、伐採した枝状の物の活用は知らなかった。

他産業では産廃となっている物の利活用は専門家ならではの発想だと思う。

### ○佐藤委員

今、水産で推しているのは、養殖事業がメインと考えている。男鹿の砂浜で水深2m程度の底が見えるような場所で牡蠣の養殖をしている。

三陸では牡蠣は垂下式という上から吊るして水深10m程度の場所での養殖が主流だが、男鹿ではできない。そこで、バスケット養殖というカゴに入れてひっくり返す養殖をしている。去年の秋から新しい試みとして取組を進めており、冬の間の収入源として期待しているところである。

正直、漁師でなくてもできる簡単な作業なので、漁だと敷居が高いが、女性の方でもできる。養殖をもっと広げていければと思う。

### □三浦水産漁港課長

温暖化の影響が大きくハタハタの記録的な不良、鮭も取れないといった状況で、漁獲量は減少傾向にある。そのような中で、安定した収入を得るための養殖と考えている。

これまで秋田県では外洋に面していて適地がないため、養殖が難しいと言われていたが、そうした中でも、漁港の中などを活用して養殖を行うことで、収入の増加につなげられると考えている。

トップランナーは、八峰町の岩館漁港で行っている「輝きサーモン」であり、多くのメディアで紹介され、県内の漁業者がこの養殖をやってみようという機運が非常に高まっている。

サーモンの養殖はある程度水深がないと難しいが、水深がそれほど無い漁港の中で何ができるかといったときに、真牡蠣と考えている。非常に有望ということで、県の方でも新たな取組に対して補助金を措置し、県内3か所で取組を進めているところである。

サーモン、車エビ、真牡蠣のほか、今、男鹿市の椿漁港ではトラフグの養殖を進めている。トラフグについては、まだ試験段階であるが技術開発も行っており、間もなく事業化レベルに達する状況となっているので、漁業産出額の向上と冬場の収入確保のためにも、引き続き取組を進めてまいりたい。

### ○伊藤委員

台湾で木材の展示販売に参加させていただいて、非常に手応えを感じている。木工商品については、補助事業ということもあり、ビジネスベースでの課題は残ったが、手応えがあったと感じている。

今後、私どもの方でもしっかりと準備をして、対応していきたい。

一方で、防疫という観点では、手続きが非常に煩雑で、ある程度ボリュームがないと難しいと思っている。水産について、足下でこうした活動をされているということで、非常に勉強になった。今後も情報交換を進めていきたい。



## ●三浦部会長

私も、堀井委員も由利本荘市松ヶ崎なので、岩城の島式漁港でも取組ができるのではないかと感じた。ハタハタも減少しているし、養殖は良いと考える。

## 【4 活力あふれる明るい農山漁村を実現する】

### ○佐藤委員

「活力あふれる明るい農山漁村を実現する農山漁村」とは、今ある村や集落に対して、こうした方がいいと提案していく取組なのか。

### □石井農山村振興課長

活力あふれる明るい農村漁村の実現に向けては、集落も人も減り、高齢化が進んでいるということで、そこを元気にしていくためには、地域の人達と外にいる人達の人材育成を進める必要があると考えている。

地域での活力を生み出すということは、そこに仕事があるとか、イベントがあるとか、そうしたことを仕掛けていく必要があるが、その元になるのは人だと考えている。

人材を育成した上で、その次に地域づくりを進めていく、ということをイメージしている。

### ○佐藤委員

おじいちゃんおばあちゃんしかいない村に、漁業、農業、林業のプロが手助けをして一つの村を作るような、観光ともコラボしたプロジェクトやイベントなどはできないか。

### ○石井農山村振興課長

良いアイデアと考える。もちろん、その地域を元気づけるとか、様々な方法があると思うが、やはり人が関わってくれる、ということが最も重要だと考えている。

関わろうとしても、その関わり方がわからない、様々なアイデアを持っているが、それを形にするのが難しいということもあり、AKITARISEといった人材育成研修を実施している。

## ●三浦部会長

私は農業者なので、中山間の集落協定の集まりがある。にかほ市にもあるし、男鹿市にも集まりはある。どこかを核にするというのはあった方がいい。

松ヶ崎では漁業者も集まっており、農地の話に加えて様々な話ができている。そうしたところに、県の担当者に来てもらって、事業や販売の話をするとか、そういう集まりができたらいいい。

牡蠣の話は、今日、聞かなければ分からなかった。そうした場所に、販売を担当する伊藤委員が来てくれると、すぐに商売がまとまるのではないか。

先ほど話題となった、ある程度のボリューム感が秋田県ではネックとなるので、安定生

産に向けた課題など、フリートークで語れるような場所や機会が必要だと考える。

### ○堀井委員

林業単体でやるのは、限界がある。新しいことがなかなかできない。仲間同士で進めていくことが重要なのではないか。

### ●三浦部会長

地域や仲間と連携しないと厳しい。業種を超えて連携していく必要がある。

私の折林ファームは何でも屋というか、山も田も地権者は一緒である。陸上の風力関係の人が会社に来れば地域の案内や紹介をしている。本当に今は一次産業の人達は何でも屋になっている。

そういう地域を創っていける支援があったら良い。漁業だから、林業だからというより、生産者が一堂に会するようなイメージが良い。15年前の昔はそんな感じだった。

地域には様々な人がいて、いろんなことができる。今は、予算は付くが、もう全く回らなくなってきた。ツキノワグマもそうだが、誰かがやらなければいけない状況になった。できない、ということもできないし昔に戻すこともできない。

できる仕組みを地域に付与する、そうすれば、地域に大学生などが入ってくるようになる。多面の取組や集落協定などの組織を受け皿にしていくこともある。おそらく、そうした話になってくると佐藤委員のイメージもクリアになってくるのではないか。

農業だけ、漁業だけで農村を考えていくと、実現していくのは厳しい。そこでやはり、仕事ということで、きれいごとでは回っていかない。お金を生み出しながら地域のことをケアしていくということも必要であり、詩の国さんのような民間事業者のマネジメントも必要になってくるのではないか。

実際にそうした取組事例はあったりするのか。

### ○石井農山村振興課長

農業者だけではなく、そこで観光やっている人など、多様な人材を巻き込んで協議会を作ってもらって取組を進めている。

協議会で様々な話をしてもらい、地域資源を活用して、例えば松ヶ崎であれば中山間ならではの食べ物や山菜、海産物であったり、そうしたものを仕事に結びつけ、オンリーワンビジネスの推進も図っていく、といったスキームで進めているところである。

ビジョンの53ページをお願いしたい。農村RMOのイメージを掲載しており、多様な方々、集落協定・中山間の直払組織だったり、集落営農だったり、農業法人だったり、こうした方々が自治会やPTAの方々と一緒になって、これまで集落で普通にやっていたことができなくなった活動を続けていくといった取組になっている。

この農村RMOに関しては、大きく3つの取組があり、農用地の保全と地域資源の活用、生活支援がある。ビジョンのKPIにも掲げているが、最終的にはこの組織の設立を目指していくことを考えている。

先ほど私が申し上げたオンリーワンビジネスもそうだが、地域の皆さんの参加がないと進まない、ということがあるので、引き続き重点的な取組として進めてまいりたい。

### ●三浦部会長

是非、農村RMOに既存の集落協定組織がつながっていくような取組を進めて欲しいと思う。漁業、林業の皆さんは集落協定には農業の地元の人しかおらず、イメージができないかもしれないが、資料の説明にもあったとおり、方向性としては進んできている、とのことなので、人がいないから、補助がないから、だとますます活動できなくなってくるので、まずは何かアイデアを募っていく必要があるのではないかな。

協議会を作らなければならないだと難しいが、少し集まろう、ということから始まるのではないかな。知り合いをたどれば必ずつてはあるので、そういう時に気軽に県に声をかけて来てもらう、今日の審議会のように観光など様々な分野の方も混ぜていければ良いのではないかな。

農村RMOは、取組に当たってのハードルは高いのか。

### ○石井農山村振興課長

ハードルがあるとすれば、「複数集落での取組」だと認識しており、隣の集落と連携するのが難しいとの声がある。

### ○三浦部会長

集落とはどの単位か。市単位ではなく旧町単位か。

### ○石井農山村振興課長

小学校の昔の学区の範囲等をイメージしている。難しいところはあるが、やはり隣接集落と一緒に取組を進めることを考えている。

この仕組みとして、集落でもととの機能ができなくなっているので、広範囲で進めていくという主目的もあり、そのような要件設定となっている。

### ●三浦部会長

男鹿だとすれば学区は広いのか。松ヶ崎だと、岩城単位ということになるか。

### ○石井農山村振興課長

もう少し狭くても大丈夫だと思う。

### ●三浦部会長

この農村RMOについて、国がいつまで支援するかにもよるが、支援がある前提だとし  
て、  
何らかのお題目がなければ、中々人も集まることができない。

そうした機会や仕組みがあれば良いと考える。農業者もそういった具体的な数値があり、全体として80数億円、産出額を上げようとなると、それだけ作る人を増やしていく必要がある。

これに比例して各方面で伸びていってもらいたいし、それは漁業者、林業者、農業者個々というよりは、グループとして増えていった方が、付加価値も増えるのではないか。

今日の専門部会では、具体的にこれが良い、というのは私もすぐには出ないが、県の中で様々にある仕組みや組織を合併する、連携するなどしていき、こうした集まりが県内に増えてきている。そのような状態の方が、数字を追いやすいし取り組みやすいのではないか。加えて、県外からのお客さんも紹介しやすいと思う。個別では対応できないし、分からないことも多い。あのグループは海の側だった、山の方だった、そういうことが上手く回るためには必要なのではないか。

上手く言えず申し訳ないが、これとこれを組み合わせたら良いのではないかという進め方が必要なのかと思う。政策の方も、可能な範囲で構わないので、組み合わせの上、連携していくこともありなのではないか。

まずは、私たち若手と言われる人間が広めていかないと、話にならないと思う。それぞれの各協議会の集まりは多数あるので、周知し、自然と地域に関わっていけたら良い。

半農半Xの取組は増えているものか。

### ○石井農山村振興課長

半農半Xは令和3年度から7年度まで5年間取組を進め、県内9地域で実施した。約100人の方が参加し、大きな成果としては移住した者も1名いる。

やはり関係人口づくりということで、始めた頃はちょうどコロナ禍の時であり、テレワークが一般的になってきたタイミングであった。どこに行っても仕事するのは同じだろうということで、自分の仕事を秋田県に持ち込んでもらい、本業をやりながら、空いた時間で農作業に従事するという趣旨で始めたが、関係人口づくりという点では、効果があったものと捉えている。

半農半Xに参加した人が東京都で集まり体験談を語ったり、複数回秋田を訪れたりしており、そういったことの積み重ねが移住であったり、二地域居住につながっていくのではないかと考えている。そうした意味では、関係人口づくりという面での効果があったものと思う。

### ●三浦部会長

最後に一つお願いというか、審議会でも知事に伝えたが、外国人や関係人口の増などで、様々な移住者が長い目で増えていってくると大変ありがたい。

やはり、現場を動かしている私たちからすると、組織を動かすのに、どうしてもマンパワーが必要となる。輸出とかになってくると、他の国の文化もある。一緒にやってくれる仲間はもう日本人にこだわってられないのではないか。ましてや農業だからとか、地域にこだわってとか、漁業だからというよりも、もっと広く発信していく必要があるのでは

ないか。

台湾直行便等の取組もあったり、個別で人を工面でできているうちはまだ良いが、山形から人を連れてきたとか、東京から人を連れてきたといっても、長い目で見れば日本の中で人が動いているのと一緒にあり、純粋に増えたことにはならない。

今後、風車はどうなるか分からないが、大きな事業が県全体で動き出している時に、外国の人たちにも、こういう仕事がある等と伝えていきたい。加えて、女性でもできるような養殖等の話もしていければ良いのではないかな。

今は、新たに産業になりそうな状況であっても人がいなくできないというところに来ている。少し厳しい言葉になるが、秋田県の外国人の雇用状況は、一次に限らずどの産業も非常に少ないのではないかな。是非、その点のフォローをお願いしたいと思う。

外国の人たちの方が日本の良さを見つけてくれたり、ここに住みたいと思ってくれる可能性がある。日本を選んで来ている以上、もちろん定住もしてくれるし、日本人以上に日本のことを考えてくれる人もいる。

直近の労働力の確保ももちろんだが、両建てでこうしたことについて農業者からも発信していきたい。今、うちにはミャンマーの子たちの紹介で6人ぐらい入ったりしている。

ただ、こうした取組は本来はメインとなるべき窓口があって欲しいと思う。このフロアの下にあるはずだが、国が違うと対応できないとか、いろんな課題がある。農業をやりたいという外国人に対して、農業での窓口はここだ、ここに来ればどこかにつないでくれる、そうした組織があれば良いと思う。

登録支援機関と言われる義務的支援ができるところが秋田には少ない。もっと外国人労働者を活用したい、となった時にしっかりとしたノウハウをもってダイレクトに紹介する仕組み、組織が必要なのではないかな。

外国人労働者確保のためのサポートセンターもあるが、やはり一次産業の方にもしっかりと対応していくことが重要なのではないかな。

ミャンマーがいいからこの話をしているわけではない。普通に数字だけ見ると、隣の県の外国人労働者を連れてこられたとしても、同様に他県にも移動しているものだと思った方がよい。

## ●三浦部会長

色々と話が尽きないが、時間の都合もあるのでここまでとする。次回までに本日の意見を整理していただき、具体的な提言につなげていくこととしたい。

## □事務局（農林政策課）

次回の予定は7月7日（火）午後1時半からオンライン開催を予定している。本日の議論を踏まえ、総合計画の達成に向けた具体的な内容について検討をお願いしたい。

以上をもって、令和8年度農林水産部会を閉会する。